

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2012年 5月 31日

派遣者氏名（専門分野）	小林 ひかり （音楽学）
-------------	--------------

下記のとおり報告します。
記

研究テーマ	ハンカ・シェルデルプ・ペツォルトの来日前の音楽活動
-------	---------------------------

派遣期間

2012年 1月 24日 ～ 2012年 3月 29日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問研究機関	ノルウェー	オスロ	オスロ大学	アルヴィド・O.ヴォルスネス
	ノルウェー	オスロ	国立図書館	オイヴィン・ノールハイム
	ノルウェー	ベルゲン	ベルゲン公立図書館	シーレン・ステーン

派遣先で実施した研究内容

今回の派遣では、ノルウェー出身で1909年来日し、1937年に亡くなるまで日本で演奏および教育活動を行ったハンカ・シェルデルプ・ペツォルト (Hanka Schjelderup Petzold) に関する資料のうち、ノルウェーで入手可能なあらゆる資料を収集することが目的であった。ペツォルトに師事した日本人は約350人いたと言われていて、その中には三浦環のように日本人として初めて国際的な名声を得た歌手もいた。ペツォルトは日本の西洋音楽受容に大きな影響を与えたにもかかわらず、その生涯と事績は十分に明らかにされていない。つまり、彼女に関する先行研究では、日本、ドイツ、北米で収集できる資料はすでに調査されているが、ノルウェーで入手可能な資料はこれまで扱われてこなかったのだ。

彼女がノルウェーに住んだのは1862年に生まれてから1878年までの間で、その後はパリ、ライプツィヒ、ロンドンなどを拠点にしたが、ノルウェー出身の音楽家としてその演奏会は北欧の雑誌や新聞でたびたび評された。それゆえに今回の滞在ではまずこれらの雑誌や新聞 (*Nordisk musik-tidende*、*Svensk musiktidning*、*Orkestertidende*、*Musikbladet og sangerposten*、*Ny illustreret tidende*、*Nordisk musik-revue*、*Bergens aftenblad*) の記事収集をオスロの国立図書館とベルゲンの公立図書館で行った。また、作曲家で音楽評論家の兄ゲルハルドや画家の姉ライスの伝記をオスロ大学図書館で、シェルデルプ家についてまとめられた *Slekten Schjelderup 400 år i Norge 1557-1957* をダイクマン図書館 (オスロ公立図書館) で閲覧した。

ペツォルトは自分の文章を出版することはほとんどなかったにもかかわらず、家族に膨大な量の手紙を書き、兄弟姉妹との手紙の交換は来日後もずっと続いた。しかもたいてい数枚の紙に両面ぎっしり書かれている。これらの手紙は彼女の生涯と事績の詳細を知ることができる貴重な資料であり、また一ヨーロッパ人の目に当時の日本がどのように映っていたのかを見ることができるのも興味深い。とりわけ兄ゲルハルドに宛てた手紙では、日本での彼女の音楽体験や自身の思いが率直に語られている。国立図書館には500通を超える彼女の手紙が保管

されているが、これらは原則コピー禁止であった。それゆえに、オスロ大学音楽学教授のアルヴィド・ヴォルスネス氏の協力を得て、シェルデルプ家の一人でスウェーデン在住のオーヴェ・シェルデルプ氏と連絡を取り、許可を得て一部の手紙の写真撮影を行った。その解読と分析は、帰国後の今取り組んでいるところである。また、彼女の手紙には、演奏会プログラムが同封されていることもしばしばあったので、これらの写真データも滞在中に入手した。それらを調べることによって、彼女の演奏活動の正確な情報やレパートリーを知ることができた。さらに、彼女の夫でドイツ出身の仏教研究家ブルーノ・ペツォルトの手紙も国立図書館に保管されていることが分かり、閲覧することができた。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

ハンカ・シェルデルプ・ペツォルトの来日後については先行研究があったので、当初の計画では、来日前の彼女に関する資料を収集するつもりであった。現地では、彼女の家族や親戚に関する資料や、来日前の演奏会データとその批評を実際に入手することができた。しかし最大の収穫は、500 通以上もの彼女の手紙が国立図書館に保管されていることが分かり、その一部を写真撮影できたことである。図書館には、来日前に書かれたものだけでなく、1909 年に来日してから亡くなる 2 年前の 1935 年に書かれたものまでであった。このように、来日後の彼女についても先行研究で扱われてこなかった資料を入手することができた。

本研究の目的は、ペツォルトがどのような芸術観を持ち、どのような態度で日本の音楽教育と演奏活動を行っていたのかを調べ、彼女が日本の西洋音楽受容に与えた影響について明らかにすることである。そのためには、現地で収集してきた資料の解読と分析をしなければならないが、彼女の筆跡の解読は困難で時間がかかっているため、まだ結論は出せていない。しかし、分析をするための材料を集めてくることができた。

現地ではシェルデルプ家の方との面会もできればしたいと思っていたが、今回連絡が取れたオーヴェ・シェルデルプ氏はスウェーデン在住のため、かなわなかった。幸い今年夏にも北欧滞在を予定しているので、その時には実現させ、来年投稿を考えている雑誌論文と博士論文には間に合うようにしたいと考えている。

派遣後の研究発表の予定

本研究の成果は、2012 年 7 月 1～7 日にローマで開催される国際音楽学会 (IMS: International Musicological Society) の大会で、6 日に口頭発表することになっている。また、ノルウェーの音楽雑誌 *Studia Musicologica Norvegica* にも投稿し (2013 年春投稿締切)、2013 年に完成を目指している博士論文『近代日本におけるグリーグの音楽の受容 (仮題)』にも含めたいと考えている。